
ゴシップ・ダンス！

空道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴシップ・ダンス！

【Nコード】

N4342A

【作者名】

空道

【あらすじ】

派遣会社ランクレイド。落ちこぼれ社員であるライアはある日片田舎へ派遣される。派遣内容は不明。これは派遣？それとも左遷？しかしライアに悩んでいる暇などなかった！

第一話・派遣か左遷か（前書き）

初投稿です。感想を頂けたらうれしいです。

第一話・派遣か左遷か

ガタンゴトン

軽快な音と共に列車が走る

窓から見える景色は一面緑の草原。旅をするにはもってこいだ

「はあゝ…。」

車内から景色を見ていた女は盛大な溜め息をついた

肩まである、夕日色をした髪はバサバサと風にあおられっぱなしだが本人は気にしていないというよりも気付いていないようだ

彼女の名はライア・トッドウィル

派遣会社として名高いランクレイド社の社員である

彼女が仕事もせずにいることの発端は3日前に遡る…

「出ていけ。」

「…は？」

上司の言葉にライアは思わず聞き返した

「出ていけ。」

「…いや、あの、部長それってどういう…。」

まさかリストラ！？

一瞬最悪な事態が頭をよぎる

「派遣要請だ。」

「な、なんだ…。リストラかと思った。」

「できれば私もそうしたい。」

安堵するライアに上司である男　タージス・ノイスは冷たく言い
はなった

ランクレイド社派遣局特務部

特務と言ったら聞こえはいいが実際は密猟者の確保から近所のいざこざの仲裁、子守りの仕事、とピンからキリまである雑用のような部だ

曰く寄せ集め

曰く駄目人間密集地帯

社内ではそう呼ばれ、あそこに落とされたら最期だ！と恐れられている

そんな部の部長であるはタージスは頭脳明晰、容姿淡麗な完璧人間であり

「どこをどう間違えてこんな部に…？」
と言われていた

「それで部長、どこへ何をしにいけないんですか？出来ればこないだのジャフリーさん宅の犬の散歩はやめてほしいんですけど」
上司のリストラ希望発言はキツパリ無視して訪ねる

「派遣場所は西サント区域第13番詰め所だ。派遣内容はその地域社員に聞くように。」

「分かりました西サント区域ですね…って西サント区域！？」

思わず大声で叫び上司に睨まれる

「部長、西サント区域って未発展区域の！？」

ランクレイド社がある中央都市はかなりの機械が発達している
この大陸では中央から離れるほど技術が落ちていくのだが、西サントは大陸のはじっこ

つまりはド田舎だ

「何か問題があるか？トッドウィル派遣社員。」

「も、問題って、だって、あう…。」

上司にニコリと微笑まれ（ライアには悪魔の微笑みに見えたが）たじろぐ

「わ、私何か悪いことしましたか…？」

「器物損害、暴力沙汰、おまけに依頼人負傷。その他を挙げればきりがないが。なにか文句でも？」

「うう…ありません。」

問題社員が氷の鬼と有名な部長に敵うわけがなかった

かくしてライアの西サント派遣は決行されることとなった

「人生ってなんだろう…？」

サント区域直行の汽車にゆられながらわけの分からないことをつぶやいてみる

第二話・落ちこぼれとエリート

ぐう

盛大な音になる

時計を見るとそろそろ正午だ

「…ご飯食べよ。」

通りかかった車内販売でサーモンベーグルとコーヒーを買うと目をつぶってぱんぱん、と手を叩き祈る

どうか派遣先にお風呂がありますように…！

「さて、いただきまーす…ってええええ！？」

食前の祈りをし、いざ食そうと手を伸ばすが

「ないっ私のベーグルがない！」

先ほどまでたしかに存在していたサーモンベーグルが跡形もなく消えていた

と、慌てふためくライアの頭上から男の声が聞こえた

「うん。車内販売にしては結構いけるな。」

「…！？」

驚き顔をあげるとそこにはぱくぱくとベーグルを食べ続ける男がいた
歳の頃は20代前半、灰色の髪をしたなかなか端正な顔の男だ

そしてライアはその男を知っていた

「キース！何でここに！？…てか私のベーグル！」

「ん？ああ、うまかったよ。ご馳走さん。」

「ああ…昼ごはんが…。」

ガクリ、と膝をつくライアを無視してキースはどかりと座席に座った
ついでにコーヒーに手を伸ばす

「いやあ、実は俺も西サングト区域に同行することになって。」

「はあ？あんた執行部でしょ？エリートがなんで田舎なんかに…
はっ、まさか左遷！？」

「期待を裏切って悪いが違っ、左遷はお前だろ。俺はタージスさん

に頼まれたんだよ。お前がこれ以上厄介ごとをおこさないように見張っててくれってさ。直々に頼まれちゃあ断る訳にもいかないからな。」

「なんだあ…、というよりやっぱりこれって左遷なのかなあ…。」
机の上に突っ伏してつぶやくライアを横目で見つつキースは呑気に景色を楽しんでいた

「…しかし、今回の派遣はおかしなところがあるな。」

その言葉に人生の不毛さについてぶつぶつと語っていたライアは顔を上げた

「うん…。それは私も思ってた。派遣内容は現地でっていうのと、私にあんたみたいだな…。つまり…その。」

「監視とはいえこのいそがしいときに俺みたいなエリートを落ちこぼれのお前につけること。」

「落ちこぼれで悪かったわね。」

顔をしかめるライアにキースは笑いかける

「ま、なんにせよ着けば分かるさ。それまでは昼寝でもして……っ！？」

「ぎゃあ！？」

ガシャン！ギイイイ！！

轟音とともに列車が大きく傾き、急停車するブレーキ音が響く！

「うきよあああ！」

「バカヤロ！口開くな、舌噛むぞ！」

「あつ…、もう遅いわよ…。」

思つきし噛んだらしく涙目になりながらも状況を確認する

「なに？脱線事故？」

「いや、どうだろう。…取り合えず怪我人の確認だ。」

「了解。」

二人は横倒しになっているらしい列車のドアから苦勞して通路に出る
どうやら元々乗車人数が少ないらしい

見たところ大怪我をしている人はいないようだ

「怪我人はいないようだな。：よし、俺は後ろの貨物室を見てくる
からお前は先頭の車掌室を見に行ってくれ。」

「分かった。あとで合流しましょう。」

「ああ。気を付けろよ。」

第三話・ついてない日

「気を付けろ、なんてキースも心配症ね。」

車掌室へ続く通路を歩きながらライアはぶつぶつと呟いていた
左遷…いやいや、派遣中に事故なんて本当についてない
踏んだり蹴ったりとはこのことだ

そんなことを考えているうちに無事に（2、3回転んだが）車掌室
についた

「よおっし、こんなこと終らせて西サントに行つて名物料理でも
食べよつと！」

なんとか思考を前向きにしてから車掌室のドアを開ける

「あのお、すみません……。」「
動くな。」

低い声とともにこめかみに固いものが押し当てられる
本能的に腰にある銃へと延びていた手は押しとどめられた

「おかしな真似をすると、殺す。」

冷めた男の声　本気だろう
うかつに動いてはいけない。後ろにいるのは列車を襲った犯人だろ
うから

ゆつくりと、両手をあげる

「質問に答える…ランクレイド社の派遣員とは、お前か？」

「…それが何に関係あるの？それとも他に列車を襲った理由が…」

「質問に答えると言ったはずだ！」

こめかみに当てられた 恐らく銃だろう がさらに強く押し付けられる

冷や汗が流れるのを感じながら慎重に答える

「…そうよ、それが、どうしたの。」

にやり、と背後で笑う気配

「確かめたかったのさ、確実に仕留めるためにな！」

引きがねが引かれる！

それと同時にライアはしゃがみこんで体勢を低くすると共に思い切り駆け出した！

背後から犯人の罵声が浴びせられるが撃ってくる気配はない
振り返らずに車掌室の中へ駆け込む

「…なんで私ばかりこんな目にあつのよ！」

泣きたくなるのを堪え、銃を構える

それに気付き、犯人も客席の陰に身を潜めた

犯人は私が背を向けたにも関わらず撃ってくることは無かった

ということは命中率が低いのか、極めて殺傷力が低いのか　恐らく後者だろう

どちらにせよ、犯人は近くに寄らなければ私を殺せないとゆうことだ

「逃げ場の無い所に行くなんてバカだな。」

やかましい！

心の中で叫ぶと同時に銃を撃った

当然、犯人に当たる筈もない

構わずに撃ち続ける私に犯人がバカにした、少々呆れた声で言う

「おいおい、頭大丈夫かよ？当たるわけねえだろ。： お前落ちこぼれか？」

「あんたなんかに言われたくないわよ！」

さらに銃を撃ちもうとするが響いたのはカチリ、という不吉な音のみ

「弾切れか？それとも演技か？まあ、どちらでもいい。どうせお前はそこで当たらぬ銃を撃っていればいい。」

「その通り。」

背後から聞こえた声に犯人は振り返ることはできない

己につき付けられた銃の存在に気付いたから

「当たらなくとも、銃声を聞いたヒーローがとんでくるからな。」

「だれがヒーロー？」

ほっとしたのを隠すように言うが安堵が混じっているのは仕方がない

「さて、銃を捨てておとなしく投降して貰おうか。」

「…くそっ！もう一人いるなんて聞いてない…！」

聞いてない？

「おい、それはどういう…」

いぶかしげにキースが問おうとした時、犯人に異変が起こった

小さくうめいたかとおもうと自分の喉を掻きむしり、苦しみだす！

「あああッ！ぐうあ…！」

「おい！？どうした…！」

「ちよっ…キース！どうなってんの…！」

「俺が知るか！」

戸惑う二人の前で犯人に更なる変化があらわれる

それは恐ろしく、おぞましい光景だった

犯人の、その掻きむしる喉、顔、手…全身から水分が奪われたように萎み、年老いたようになり、ついにはミイラのように骨と皮のみになってしまった

事切れた体が床に倒れるがその音はまるでスカスカの枯れ木が倒れるような軽い音だった

「これは…。」

「な、に…？」

ついさっきまで人だったものに目を向け言葉もなく立ちすくむ

あまりのことにただ呆然とするしかなかった

「本当にどうなってんのよ…。」

「…俺が知るか…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4342a/>

ゴシップ・ダンス！

2010年10月17日15時10分発行